

専門研究概要

A01「原典」

A01-01・計画研究

『明月記』『吾妻鏡』の写本研究と古典学の方法

研究代表者	五味 文彦 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
研究分担者	安田 次郎 お茶の水女子大学文教育学部 教授
	近藤 成一 東京大学史料編纂所 教授
	今村 みゑ子 東京工芸大学女子短期大学部 助教授
	田淵 旬美子 国文学研究資料館 助教授
	桜井 陽子 熊本大学教育学部 助教授
	小川 剛生 国文学研究資料館 助教授
	本郷 和人 東京大学史料編纂所 助教授
	尾上 陽介 東京大学史料編纂所 助手
	高橋 慎一郎 東京大学史料編纂所 助手
	菊地 大樹 東京大学史料編纂所 助手
	井上 聡 東京大学史料編纂所 助手
	高橋 典幸 東京大学史料編纂所 助手

概要

日本中世の重要な位置を占めている『明月記』『吾妻鏡』を対象にしてその写本研究を行うとともに、古典学の方法を探ることを目的とする。特にこの二年間の研究で大きな成果をあげてきたので、その達成の上にさらに研究を深化させる。『明月記』は日本中世を代表する歌人である藤原定家の日記であるが、定家は中世の古典学の基礎を築いただけにはそこには政治や文化情報だけではない多くの情報が載っている。そこで散在している原本の断簡を精力的に集めるとともに、原本が失われている部分については写本を集め、さらに広く写本の研究を進めて、『明月記』の校訂本をつ

くり学界に提供したい。他方で難解な『明月記』の注釈を進めるなかで、その全体像を提出することを目指す。また鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』は鎌倉時代の歴史を探るうえで基本的な史料であるが、江戸時代になると歴史の古典として学ばれているので、その写本を広く集めるとともに、原本は失われているので、これまでの国史大系本を越える、しっかりした校訂本を作ることとしたい。

研究の進め方は次のように行いたい。『明月記』班と『吾妻鏡』班の二つ研究組織をつくり、研究会を開いて課題を設定して推進する。そのうえで情報を交換しながら、相互の関係にも注意して総合的に研究を進めてゆく。『明月記』班は、全体の研究会を毎月一回実施して、『明月記』の注釈と現代語訳の方法を吟味する作業を行い、(1)原本に基づくテキストの作成、(2)写本の収集、(3)藤原定家の著作の調査と収集、の三つの作業について、それぞれに研究分担者に割り当てて個別に実施し、定期的に報告会を開き情報として蓄積してゆく。『吾妻鏡』班は、研究会を今年度から毎月一回実施することとし、注釈研究と本文研究の課題を設定するとともに、記事の誤謬を改めてゆき、(1)校訂本に基づくテキストの作成、(2)写本諸本の収集とその情報の交換、の二つの作業を行うこととする。

A01-02・計画研究

原本『老子』の形成と林希逸『三子虜斎口義』に関する研究

研究代表者	池田 知久 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
研究分担者	関口 順 埼玉大学教養学部 教授

研究目的

1. 中国の古典文献の中で最も重要な哲学書である『老子』は、『史記』老子列傳以来、春秋時代末期の成書などとされてきたが、この伝統的な見解は歴史的事実ではない。それ故、原本『老子』の形成が新たに問題にされなければならないのである。

一方、南宋時代の朱子学者である林希逸の『老子虞齋口義』『莊子虞齋口義』『列子虞齋口義』のいわゆる『三子虞齋口義』は、朱子学を中心としながらも儒教・道教・仏教の三教一致論を説いており、日本の江戸時代に強大なインパクトを与えただけでなく、中国・朝鮮にも一定の影響を持った。しかし、テキストの問題を始めとしてまだ解明されていない点も少なくない。

本計画研究は、一つには原本『老子』の形成、二つには林希逸『三子虞齋口義』の版本、の二つの研究対象を研究し、紙と印刷術の発明以前と以後とにおける中国古典の原典の形成と注釈の流伝とを解明する。

2. 近年、中国大陸ではおびただしい量の、しかも重要な内容を有する古典文献が帛書・竹簡・木簡という形で陸続として出土しており、これらの出土資料を無視ないしは軽視したのでは中国古代の哲学・宗教・歴史・考古・語学・文学などのいかなる研究も進まない、という状態に至っている。

本計画研究は、湖南省長沙市馬王堆漢墓出土の帛書『老子』甲本・乙本と湖北省郭店村戦国楚墓出土の竹簡『老子』甲本・乙本・丙本などの新出資料に基づき、厳密な文献学的研究と深い思想史的研究とを併せて行うとともに、東アジア三ヶ国（日本・中国・韓国）の古典文化の異同を視野に入れ、かつそれを重視しようというものである。

3. 出土資料を利用した原本『老子』の形成という研究テーマについては、中国を中心とするゆるやかな国際的研究連係がすでにできあがっており、相互にたえず連絡を取りながら研究を進めているのが現状である。

一方、林希逸『三子虞齋口義』に関する研究では、研究が最も進んでいるのは日本であったが、本計画研究の推進とともに、中国・台湾・韓国の同種の研究も盛んになりつつある。

本計画研究は、以上の二つの研究対象について、日本国内の研究者と絶えず意見交換・学術交流を行いながら研究を進めるだけでなく、海外（中国・欧米・台湾・韓国）の研究者とも可能な限り頻りに意見交換・学術交流を行いながら研究を進める予定である。

研究計画・方法

1. 平均2ヶ月に1回程度、研究会議を開き、代表者と分担者とが馬王堆漢墓帛書『老子』・郭店楚墓竹簡『老子』、同じく儒家系文献、『老子虞齋口義』・『莊子虞齋口義』などについて報告する（合計4回）。研究会議には国内・海外の研究機関より研究協力者を招き、講演会・研究会を開くなどの形で専門的知識を提供してもらう（約5名）。研究会議その他による本研究の成果は著書・論文などにまとめて単行本・雑誌掲載の

形で公刊する。

2. 高性能のスキャナー・デジタルカメラを各1台購入し、これを十分に利用して郭店楚墓竹簡『老子』やその他の新出資料の撮影やデータベース作りを進める。入力・出力には研究代表者・分担者が働くだけでなく、学生アルバイトに労力を延べ約200時間提供してもらう。

3. 『三子虞齋口義』の版本の日本における所在・状況を調査するために、約3日間の国内調査・研究旅行を延べ3回行い、複写・マイクロフィルム化・デジタル撮影を進める。この調査・研究旅行には、若干名の研究協力者にも参加してもらい、専門的な立場からの意見を聴く。

4. 夏期及び冬期休暇等を利用して約10日間の中国・韓国への調査・研究旅行を延べ2回行う。目的地は中国社会科学院、北京大学、湖北省荊門博物館、上海市博物館、湖南省博物館、韓国成均館大学等である。また約10日間の海外研究者の招聘を1回行って意見交換・学術交流を進める。

A01-03・計画研究

チベット大蔵経とチベット蔵外文献研究

研究代表者 御牧 克己
京都大学文学研究科 教授

研究目的

本計画研究は、チベット学に於ける古典学の再構築を目指し、以下の二点より研究を遂行する。

1. 従来明らかになっている主要文献の整理（即ち、目録、解題、批判的校訂本、翻訳、データベースの作成）。チベット大蔵経とチベット蔵外文献について夫々に行う必要があるが、特に、研究代表者御牧の具体的な分野研究としては、諸学派の教義を体系的に叙述したチベット宗義文献の体系的な整理と、ボン教教義文献の解明（仏教教義文献との比較にも留意しつつ）に主眼を置く。

2. 未入手文献の入手。チベット大蔵経の写本、チベット蔵外文献、ボン教大蔵経について我が国に将来されていないチベット文献の入手に努める。

研究計画・方法

研究目的欄に掲げた項目に沿って以下の研究を遂行する。

1. 従来明らかになっている主要文献の整理。特に、研究代表者御牧の分野研究として宗義文献を初期（仏教前記伝播期：9世紀中頃まで）、中期（10～16世紀）、後期（17, 8世紀）の三段階に分け、中期宗義文献を集中的に整理し、終了し次第、後期宗義文献の整理にも着手する。また、本計画研究前期以来継続しているボン教教義文献『ボン門明示』の批判的校訂本と翻訳を完成に向けて整備しつつ、同書中に引用されている諸文献の同定とその夫々の文献について解題を完成する。

2. 未入手文献の入手。チベットのラサで刊行されたボン教大蔵経の内、先づテンギルを購入する。ベルリンの国立図書館にマイクロフィルムが所蔵されるリタン版カギル、オーストリア学士院とイタリア学士院の共同事業によって入手されたスピティのタボ寺の写本、等についてコピー-或いはマイクロフィルムの入手に努める。宗義文献やボン教関係の文献を始めとして、その他の従来未入手のチベット蔵外文献を予算の許す限り購入する。

上記の研究代表者の主要な分野研究の内、チベット宗義文献研究は、最終的には全宗義文献を対訳形式で網羅した『チベット宗義文献集成』（仮題）といったものにまとめあげることが目標とする。ボン教文献研究は、将来『ボン教文献解題辞典』（仮題）にまとめあげることが最終目標とする。

A01-04・計画研究

タミル古典の文献・写本・電子ファイルに関する情報および現物の収集

研究代表者 高橋 孝信
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究目的

タミル文学はサンスクリット文学とともにインドを代表する文学であるが、わが国では欧米と比べ研究が立ち遅れ、そのためタミル原典さえあまりない。このような現状を踏まえ、本研究では、タミル古典の刊本（復刻本も含む）、写本、電子テキストに関する情報の収集と、それら現物の入手を目的とする。

具体的には、1) 欧米主要図書館（ことに大英図書館）所蔵本の調査およびコピー入手、2) インド各地の書店で原典テキストおよび最近出版され始めた一部復刻本の入手、3) インド・チェンナイ（旧マドラス）

のU.V.スヴァーミナータ・アイヤル図書館での貝葉写本のマイクロフィルム化、4) インドの某研究機関（機関名を公表できない理由については文部科学省に報告済）と共同で作成している電子テキストの整備、5) 国内ではそれら情報・資料の整理、などを行う。

研究計画・方法

上記目的達成のための平成11～12年度期の研究の経験から、部分的変更を加えて、以下のような計画とする。1) については、欧米主要図書館の多くはインターネットで所蔵本の検索ができるようになってきているが、外部からのアクセスに対しては完全に開かれていなかったり、検索してもなかなかヒットしないなど、やはり現地に赴くのが一番であることから、できる限り現地出張する。また、大英図書館は古い刊本を最も多く有するが、原本（ことに古書）保護の理由などもありコピー代は高く、また小型の刊本の場合、でき上がったコピーの整理も大変である。それらの代金や整理に要する労力に見合う刊本コピーの選別をきちんとしてゆく。2) インドの中でもタミルナードゥ州の本屋、ことにタミル原典テキストを扱う書店では、海外からの注文に対応していない。そこで、やはり現地の書店へ直接赴いて収集する。3) 貝葉写本については、上記図書館が乗り気ではない。今後も交渉を続けるが、写本のマイクロフィルム化は実現が難しいであろう。4) 電子テキスト作成プロジェクトは順調に成果を上げている。しかし、入力方式の不統一や入力ミスが多いことなど、実用のためには改善すべき点もある。5) インドで入手した刊本の整理（ことに図書登録）や分類には予想以上の時間がかかる。また電子テキスト自体の不備から、実用化のためにはやはり相当の時間がかかる。アルバイトも使用しながらの作業となるが、やはり筆者もかなりかわらざるを得ない。地道に作業を進めるつもりである。

チャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写本研究

研究代表者 間野 英二
京都大学大学院文学研究科 教授
研究分担者 真下 裕之
京都大学人文科学研究所 助手

研究目的

世界の各国の図書館に写本の形で保存されているチャガタイ・トルコ語およびペルシア語の古典を精査し、それらをコンピュータを用いて整理・分析することによって、イスラーム世界に於ける古典像の再構築を目指す。

特色と予想される成果

研究代表者の近年の写本研究の方法の継承・発展を計るものであり、写本のマイクロフィルムによる収集、コンピュータを利用したQWIC索引の作成、校訂本の作成、訳注の刊行などが予想される。

研究の位置づけ

この種の研究は、国際学界でも研究がなお不十分な分野であり、本研究はこの分野の最先端をゆくものである。

従来の研究経過・研究成果

平成6年度～平成8年度の「トルコ・イスラーム時代中央アジア文化の総合的研究」に関する科学研究費(基盤研究(A)(1))により、『パーブル・ナーマ』の校訂本、コンコーダンス、訳注、『ターリーヒ・ラシーディー』の一部の校訂テキストと訳注、『シャイバーニー・ナーマ』の校訂テキストを刊行した。また平成11年度～平成12年度の「古典学の再構築」に関する科学研究費(特定研究(A)(1))を使用して、ロシア、イギリス、イラン、トルコの図書館に所蔵される諸写本を調査し、研究成果の一部は英文論文、邦文著書などで公表し、またトルコにおける国際学会でも研究発表した。

役割分担

間野は、総括および、主としてチャガタイ・トルコ語写本を担当し、真下は主としてペルシア語写本を担当する。

計画・方法

1) 研究代表者らのもとには、従来の研究を反映して、かなりのチャガタイ・トルコ語およびペルシア語写本のマイクロフィルムが将来されている。しかし、これも

なお不十分であり、その欠を補うため、写本調査及び情報収集を目的とした外国及び国内の調査旅行を行う。

2) 調査した写本の内、重要な写本についてはマイクロフィルムによる収集を行う。

3) 蒐集したマイクロフィルムの内、特に重要なものの焼き付けを行い、解読・整理に供する。

4) アラビア文字を扱える専門家の協力を得て、焼き付けたフィルムのテキストをコンピュータに入力する。これには現有の電算機を用いる。

5) 原典の校訂本など、中央アジア・イスラーム関係図書の収集を行う。

中国中世の道家・道教文献の形成

研究代表者 堀池 信夫
筑波大学哲学思想学系 教授

研究の目的

中国中世(ひとまず六朝期から唐末までを指す)においては、道家・道教的典籍、すなわち『老子』『莊子』の新しい解釈に基づく典籍が多数作成されたが、本研究においては、唐代においてその標準テキストとされていた『老子道德経玄宗注』『老子道德経玄宗疏』を主軸に据え、それらの形成について、先立つ六朝期における典籍をどのように受容・咀嚼し、展開されてきたかを、文献的・思想的との両面において明らかにする。あわせて、『玄宗注疏』以後、唐末五代にまで至る展開を、『玄宗注疏』を承ける『老子道德経広聖義』によって明らかにする。

本研究とほぼ同時代の道家・道教的典籍について、従来の思想史的観点に基づいて行われた研究に、Isabelle ROBINET, "Les Commentaires du Tao To King, jusqu'au VIIe siècle", Paris 1981. がある。また同様の問題をより一般的・概説的水準で説いたものに、熊鉄基他『中国老学史』福建, 1995. がある。本研究はこうした先行成果を視野に収めつつも、文献的・書誌的かつ思想的に一層緻密に展開したいと企図している。

研究の契機

平成11年度・12年度の本特定領域研究において、ヨーロッパにおける中国哲学受容を研究し、その成果の一端として論文「ヘーゲルと『老子』」を執筆した(『古典学の現在』Ⅲ, 掲載予定)。その際気づかれたのは、

本特定領域研究の原典班で行われているような原初的な老子の思想ではなく、一般に老子の思想とか老荘思想とかいわれて、一種の常識・共通理解項となっている老荘思想の形成について、より細かな探求が必要であるということであった。普通、そのような老荘思想の形成は、大体中国中世（六朝・唐）とされている。そこに本テーマを行う理由がある。そしてそうした老荘の成立を、その基盤となるテキストそれ自体（『玄宗注疏』等）の分析において跡づけようとする試みが、本研究である。

研究の方法・手続き

以下のような方法・手続きによって研究を進める予定である。

- ① 基軸となる『玄宗注疏』の編纂経緯の研究
 - a) 玄宗の学問と政治的方向性
 - b) 編纂の体制
 - c) 編纂参与者たちの学問と思想
- ② 『玄宗注疏』の思想的傾向の分析
 - a) 六朝典籍からの受容
 - 1) 河上公注との比較
 - 2) 想爾注との比較
 - b) 『広聖義』への展開
 - 1) 『広聖義』と『注疏』の解釈との比較
 - 2) 『広聖義』の宇宙論

それに加え最後期のチベット蔵外文献学説綱要書とは、ここではチベット仏教ゲルク派の文献群を意味するわけであるが、それらに伝統として継承される思想内容の分析として日常的相対的真理（世俗諦）と絶対的真理（勝義諦）すなわち二真理（二諦）に着目し、ゲルク派の思想史を跡付けようとする。その二真理相互の関係に関する見解の提示はゲルク派の祖とされるツォンカパ（1357 - 1419）に遡り得るが、さらにカダンパに配せられるチャパチョキセンゲ（1109 - 1169）の見解に始まるであろうことが、ここ二年間の研究成果から明らかとなった。それはさらにインド仏教自立中観派のカマラシーラ（c. 740 - 797）に跡付けられる。そしてカマラシーラ自身が『解深密経』や仏教論理学派の巨匠ダルマキールティ（c. 600 - 660）のアポーハ論から二真理相互の関係を考察している。したがってチベット仏教思想史の解明を二真理説を着眼点とし、その背景としてインド仏教思想史上に遡源し、その典拠を明確に示すことを狙いとする。

チャパチョキセンゲには『東方自立中観三論書の千の投与』（dbu ma shar gyi stong thun）なる著作が存在するが、彼がいかに自立中観派の見解を重視し継承しているかを、その著作の翻訳を通じ明らかにしたい。また彼の見地が帰謬論証中観派の見解を最高のものとするゲルク派にいかん影響を与えたかを究明するものである。

A01-07・公募研究

チベット蔵外文献学説綱要書の視座より見たインド古典諸論書の思想の文献学的研究

研究代表者 森山 清徹
佛教大学文学部 教授

本研究では最後期のチベット蔵外文献すなわち
1) ゲルク派（dge lugs pa）の伝統に属するジャンヤンシェーパ（'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje（1648 - 1722）の大学説綱要書（Grub mtha' chen mo, GTCM）
2) 同じく同派のチャンキャ二世ロルペードルジェ（lcang skya II Rol pa'i rdo rje, 1717 - 1786）によるチャンキャ学説綱要書（lCang skya grub mtha', CKGT）これらの批判的校訂本と翻訳を作成しつつ、そこに典拠として引用、解説されるインド古典諸論書の思想内容を吟味、分析し、チベット仏教思想史の形成過程においてインド古典諸論書が反映されている足跡を実証することを目的とする。

A01-08・公募研究

サンスクリット翻訳文献群としてのチベット大蔵経の研究

研究代表者 室寺 義仁
高野山大学文学部 助教授

平成13年度特定領域研究（A）「古典学の再構築」の新規公募に当たり、チベット学分野の原典研究として、ここに研究課題「サンスクリット翻訳文献群としてのチベット大蔵経の研究」と題して応募した理由は、何よりもまず、昨年10月、高野山大学により、チベット大蔵経（高野山大学所蔵デルゲ版）の完全デジタル資料が完成し、世界で初めて、一つの版全体が、PC上の研究分析対象資料として活用できるようになったという画期的な点にある。

このデジタル資料を活用して、当該研究課題の許で

集中的に行ないたいと考える文献分析作業は、次の三点に要約することができる。すなわち、(1)チベット大蔵経に収められている各翻訳テキストの内、仏教諸文献(特に、経典と論書)に限定して、それぞれのテキストのコロフォンに記された情報を整理し、古典チベット語文化圏以外の(例えば、インド、あるいは、コータンなどからの)出身者である翻訳協力者、並びに、チベット人翻訳者を特定した、翻訳協力者/翻訳者ごとの翻訳テキストリストを作製する。(2)そのリストを、チベットにおける仏教の前期伝播期と後期伝播期に二分化して、前者のリストを「デンカルマ目録」(824年成立)と対比照合して、古典チベット語の翻訳テキストであることが確証されるものについて、サンスクリット校訂テキストとの照合リストを完成する。そして、(3)このリストを基に、主要なテキストを歴史文献学的に比較分析することによって、古典チベット語翻訳文から知り得る、翻訳技術/翻訳用語の特性を個別事例に即して明らかにすることを目指すものである。その際、このような作業過程の中で、特に注目すべきは、最初期の翻訳協力者で、翻訳術語が標準化される過程において重要な役割を果たしたと思われる人々、すなわち、チソンデツェン王によってカシュミールから招かれた、スーレンドラボーディ、ジナミトラ、ダーナシーラといった大学匠たちが関与した翻訳文献群であろうと思われる。彼らは、それぞれに『華嚴経』『般若経』といった初期の大乗経典、アビダルマやヴィナヤの最重要テキストの翻訳に関わるとともに、『翻訳名義大集』の編纂にも参画しているからである。

さて、こうした基礎作業を通して初めて完成されるリストを基に、サンスクリット・チベット両テキストを比較しつつ歴史文献学的に吟味することによって、本研究が目指す成果は、チベットへの仏教前期伝播期における、サンスクリットから翻訳された古典チベット文から知り得る、個々の翻訳者による翻訳技術/翻訳用語の特性を個別的に明らかにすることである。例えば、西田龍雄が、中古チベット語(旧仏教チベット語:7世紀-9世紀初頭)と古典チベット語(826年旧仏教チベット語が改定され、綴字規則とサンスクリット化された統辞法をもって制定された新仏教チベット語)に区分し、あるいは、András Róna-tas が、Mittel-Altibetisch(650-814.チベット人翻訳官ベルツェックやイエーシェーデーなどの翻訳活動期)と Spät-Altibetisch(815-11c.イエーシェーオエやリンチェンサンボなどを代表とする、サンスクリットからチベット語への訳語語彙集である『翻訳名義大集』『二巻

本訳語集』に従った翻訳時期)に区分する、これら両時期の翻訳事情を、個別的事例に即して少しずつ明らかにして行きたいと考えるものである。一例を挙げるならば、サンスクリットと対照することによって、古典チベット語における使役の助動詞、*byed pa* と *'jug pa* の機能上の相違を明かにすることができるはずである。Michael Hahn は *'jug pa* が本動詞/助動詞として用いられる場合の、それぞれの現在・過去・未来・命令語幹の形が相違することは指摘しているが、サンスクリットの表現にまで立ち返って、サンスクリットの使役形の能動態/中動態の表現を受けて、翻訳者によっては *'jug pa* と *byed pa* を区別して使用しているという点を指摘するまでには至っていない。

大蔵経のような大部の古典文献の用語法を網羅的に分析する世界的研究の進展に、PC上の作業を加える本研究の果たす役割は、計り知れないものがあると考えられる。

A01-09・公募研究

アフガニスタンとパキスタンより発見された 仏教写本の研究

研究代表者 松田 和信
佛教大学付置研究所 教授

旧ソビエトのアフガニスタン介入と、それに続いて現在に至るアフガニスタン内戦は、現地の荒廃と引き換えに、世界の古写本マーケットに膨大な量のアフガニスタンおよびパキスタン出土仏教文献の流入という皮肉な結果をもたらした。マーケットに現れた仏教文献の大部分は欧米の研究機関あるいは蒐集家に引き取られていった。そのような状況下、今年の初めに2体の大仏がタリバーン勢力に爆破されたことで世界的ニュースとなった、アフガニスタンのバーミヤン渓谷北部の洞窟の中で、今から数年前、アフガン難民によって1万点以上もの大量の仏教写本が発見され、それらはドバイからヨーロッパのマーケットを経由して、ノルウェーのスコイエン・コレクションに引き取られた。

これらの写本類は、カローシュティー文字、バクトリア文字、クシャーナ文字、北東型グプタ文字、北西型グプタ文字、ギルギット・バーミヤン文字といった、2世紀から8世紀にかけてのインド系書体で貝葉(ターラ椰子の葉)、樺皮(白樺の樹皮)、動物の皮に

書写されたもので、その中には判明しているだけでも、カローシュティー文字による『大般涅槃経』(2世紀)、クシャーナ文字による『八千頌般若経』(3世紀前半)、グプタ文字による『勝鬘経』『阿闍世王経』(5世紀前半)、ギルギット・バーミヤン第1型文字による『法華経』『無量寿経』(6-7世紀)などの、驚くべき内容と年代の仏教文献が含まれている。

これらの写本類はその重要性からして一刻も早く研究出版され、学界の共有財産となることが望まれるが、本研究の代表者は、コレクションの所有者であるマーティン・スコイエン氏より研究出版の許可を受けてヨーロッパの研究者数名と共に研究を進め、本研究に先立つ「古典学再構築」における2年間の公募研究(「スコイエン・コレクションのアフガニスタン出土仏教写本研究」)において、それらの一部を研究成果として出版するに至った。またこの2年間の間に、スコイエン・コレクション以外にも、最近世界各地の個人・機関が入手したアフガニスタンおよびパキスタン出土写本を閲覧することができるようになった。例えば、米国ボルティモアのウォルターズ・アートギャラリーの所蔵するパキスタンのギルギットで数年前に発見された説一切有部に属する梵文『長阿含』の椀皮写本や、我が国の個人蔵の写本類等である。

そこで本研究においては、今後さらに2年間の予定でこれらのコレクション所蔵の新出仏教写本類の解読研究を継続して行い、研究の終了したものから順次出版することにしたい。それらが出版されたなら、世界の仏教研究のみならず、インド文字研究あるいはインド古典研究に多大な貢献をなしうるものと思われる。

A01-10・公募研究

イラン語仏典とイラン語の仏教用語の成立について

研究代表者 吉田 豊
神戸市外国語大学外国語学部 教授

研究分担者 影山 悦子
日本学術振興会(神戸市外国語大学)特別研究員

仏教の東方への伝播の影であり注目されていませんが、仏教は西方、すなわち現在のアフガニスタンやウズベキスタン、タジキスタン、さらには中華人民共和国新疆ウイグル自治区の西端地域といった、かつて

イラン系の言語が話されていた地方にも仏教は伝播していました。そしてインドで古典となって流布していた仏典が各々の地域のイラン語に翻訳されていたのです。具体的な言語としては、コータン語とトゥムシク語と命名された2つのサカ族(ギリシャではスキタイ族と呼ばれていた民族です)の言語、ソグド語、及びバクトリア語があげられます。さらに現在のトルクメニスタンで話されていたパルティア語のマニ教文献のなかに、相当数の仏教用語がマニ教の概念を表す用語として導入されていて、パルティア語圏にも仏教が伝播したことが分かっています。本研究ではこれらイラン系の言語に翻訳された仏典にはどのようなものがどれほど存在するのか、何時頃のものか、何語から翻訳されたのか、翻訳の正確さはどうか、仏教導入以前の土着の文化がどれほど反映されているのかなどの問題を、明らかにすることを目的としています。特に仏教用語の成立過程は、インド語からの借用によるものであれ、翻訳借用によるものであれ非常に興味深いテーマです。

これらのうちソグド語仏典は大半が漢文に翻訳された仏典からの重訳であることが明らかにされていて、漢文原典との組織的な対照が必要です。そのような研究は1930年代にドイツの仏教学者 F. Weller が先鞭を付けましたが、当時発表されていたソグド語仏典はごくわずかでした。その後大量のソグド語仏典公表されましたが、類似の研究は絶えて行われることはありませんでした。これはソグド語と漢文を同時に研究できる研究者がいないことに原因があったのです。私たちは日本人であることの有利さを活用して、いくつかのソグド語仏典の原典を明らかにしてきましたが、日本の研究者が発表されているソグド語仏典全体に対して Weller がしたような原典との対照分析を行う段階に達したことを痛感しています。

コータンはシルクロード最大の大乗仏教のセンターでしたから、コータン語の仏典についての研究では、コータン人がどれほど大乗仏教の発展に寄与したかが問題になると思われます。また未だに原典が比定されていないコータン語仏典断片が相当数存在しますから、それらを比定することが当面のそして緊急の問題となります。さらにコータン地区で発見された梵語仏典とコータン語仏典との関係なども大いに研究の余地があります。特に日本では漢文文献を利用したコータン及びコータン仏教の歴史についての研究の伝統と蓄積がありますから、そこから得られた知識とコータン語仏典から知られることを比較してみる意義は非常に大きいと考えられます。コータン出土の梵語の法華経(一

般にはカシュガル本と呼ばれています)にコータン語の奥書があることと、この写本成立に果たしたコータン人仏教徒の役割については、前年度の研究で有る程度明らかにすることができました。

同じくサカ族の言語ではありますが、西域北道で用いられていたトゥムシク語の仏典は、小乗仏教のセンターであったクチャの仏教の影響を強く受けていて、トカラ語仏典と並行するテキストも発見されています。またトゥムシクで発見された仏教寺院の遺跡に残された塑像なども、クチャ仏教との強い関係を示しています。しかし発見されている資料の量そのものが少ないため、不明な点が多いのは残念なことです。

最後にアフガニスタン及びウズベキスタンの言語であったバクトリア語の仏典に関しても述べておかなければなりません。およそバクトリア語で書かれた文書が存在することすら、つい10年前までは知られていませんでした。最近になって発見された100点ほどの文書の中に、数点の仏教文献が存在することが報告されました。発表された1点は、仏典の奥書ですが、言及された仏の名前から阿弥陀経との関連が指摘されていて、この地域の仏教がどんな系統のものであったかについて興味が尽きません。またこれらの資料の一部は、最近イスラム教の原理主義者によって破壊された大仏で記憶に新しいパーミヤーンで見つかったらしいというので、そのことから興味深い資料です。

A02「本文批評と解釈」

A02-11・計画研究

六朝期の著作における伝統の継承と変容

研究代表者 齋藤 希史
国文学研究資料館文献資料部 助教授

研究分担者 興膳 宏
京都国立博物館 館長

研究目的

六朝期の学術文化は、古代以来の典籍の系統づけの成立、自覚的な文学創作意識の誕生、文学・書画理論の展開と異分野間の相互交渉という顕著な現象を有する点で、中国古典文化の流れにおいて、きわめて重要な位置を占める。本研究は、これらの諸現象相互を連関・統合させながら研究を加えることで、六朝学術文

化の全体像を提示しようとするものである。

具体的には、1) 梁元帝『金楼子』の研究、2) 文学批評用語の研究、3) 六朝伝記資料の研究の三つの柱を立てて、所期の目的を達する計画である。

研究計画・方法

1) 『金楼子』は、本文校訂を行なう。国内資料では校勘に不足する事態も考えられるので、必要に応じ、中国の所蔵機関で調査を行なう。

2) 文学批評用語の研究は、データベースを作成する。適宜研究補助を雇い、作業の効率化を図る。

3) 伝記資料の研究は、六朝典籍の著者として重要な人物をピックアップし、資料の整理と訳注の作成に着手する。研究協力者の協力を全面的に仰ぎ、謝金・旅費などは多めに配分する。

全体の作業を通じて、コンピュータによるデータ処理を積極的に活用する。

A02-12・計画研究

インド哲学における聖典観の展開

本文批評の方法論的反省を踏まえて

研究代表者 丸井 浩
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 金沢 篤
駒澤大学仏教学部 助教授

研究課題と目的

1. 哲学と宗教の融和ないし未分化は、一般的にインド思想の注目すべき特徴の一つとされているが、この問題を具体的にインド哲学原典に即して解明する試みは、従来あまりなされていない。

2. 本研究の課題は、インド哲学における聖典観の展開を、ニヤーヤの文献を中心に分析することである。ニヤーヤとは、論理的思考を非常に重視したバラモン哲学の一派であるが、正統バラモン哲学諸派とは異なり、ヴェーダ聖典を「信頼すべき言葉」の一種として相対化し、ヴェーダの権威の論理的証明に意を注いだ。特に10世紀前後にはその議論が盛んになされた形跡がある。

3. その意味でもっとも重要な情報源(内容・量ともに)となるのがジャヤンタ・バッタ(9世紀後半)の『ニヤーヤ・マンジャリー』、およびほぼ同時代に活躍したヴァーチャスパティ・ミシュラの諸作品であり、